



いっしゅうき 一周忌ってどういう意味なの

しご ねんめ めいにち し ひと ぎょうじ 死後1年目の命日に死んだ人をしのぶ行事

いっしゅうき ぶつきょう ひと し ねんめ おな つきおな ひ おこな ぎょうじ ほうよう 一周忌とは、仏教で、ある人が死んだのち、1年目の同じ月同じ日に行う行事（法要）のことで、1回忌ともいいます。この日に、親族や親戚、ごく親しかった人たちが集まって、死んだ人をしのんで儀式（法要という）を行います。

かいき かいき かいき 三回忌、七回忌、十三回忌などもある

ぶつきょうじき では、いっしゅうき あと かいき かいき かいき かいき かいき かいき かいき 三十三回忌の法要も行います。場合によっては、五十回忌の法要を営むことがありますが、まれです。三十三回忌で、一応、死者とのえんが切れると考えられるからです。

いっしゅうき あと ねんめ かいき ねんめ かいき ねんめ かいき じゅんじゅん ほうよう 一周忌の後、2年目に三回忌、6年目に七回忌、12年目に十三回忌と、順々に法要を行います。

ぶつきょうじき しんとうじき きょうじき しんとうじき ねんさい ねんさい ねんさい 仏教式のほかに神道式やキリスト教式もあります。神道式では、一年祭、三年祭、十年祭と続きます。キリスト教式では、追悼ミサを行ったりします。（監修・青木 国夫）

